

東日本大震災 【2021年の記事から】

## 大川小遺族と、くくらないで



永沼さん（左）は、震災伝承に取り組む同世代と語り合う「若者トーク」を何度か開いてきた＝2019年12月、仙台市

### ■ 26歳の語り部、メディアへの違和感

永沼悠斗さん（26）は、自らの母校で、東日本大震災で84人の児童・教員が犠牲・行方不明になった石巻市の大川小や生まれ育った地域について、語り部活動をしている。何度も取材を受ける中で、疑問に感じてきた。メディアはどうしていつ

も「大川小の」「遺族の」永沼くんと、とりあげるのだろうか――。

違和感は高校生の時にさかのぼる。野球部の主将としてインタビューされた。チームや試合のことを話したかったのに、野球のことはほぼ聞かれなかった。大川小の卒業生であること、同校に通う弟を津波で亡くしたことを聞かれ、そればかりを書かれた。

野球の時、大川小や弟のことは頭がない。チームをどうよくし、どう勝つかだけを考えているのに。「何かを成し遂げる背景には、家族を亡くした経験があるという方が描きやすいんでしょう」

2016年、大川小の校舎の保存を巡る公聴会で発言したのをきっかけに、継続的に取材を受けるようになった。震災の伝承活動に携わる中でも、多くの記者に会った。

被災地の記事は「V字回復」のストーリーが目立つという。「震災10年」の報道でもそうだった。「日常があって震災が起き、つらい経験をし

て立ち直る」。人それぞれ違う経験を、同じ形で切り取っていないだろうか。

永沼さんは大学に入ってから、各地の災害現場にボランティアに出向いた。震災の時の恩返しをしたい、災害現場を知ることによって次の災害に備えたい、そう思ってきたからだ。

19年10月、台風被害を受けた丸森町に駆けつけた。取材を受け、自らの被災経験についても話したところ、ことさらに「大川小遺族、ボランティアへ」と報じられた。大川小の遺族だからボランティアをやっているわけではない。自分の意図はちゃんと説明したはずなのに。

「震災で大切な家族や故郷をなくしたのは事実。報道で触れられることは仕方ないけれど、看板のように扱われるのは、違和感がある」

わかりやすく報道するのがメディアの使命だということもわかる。でもそのために、自分たちは簡単にくくられていいのだろうか。同じ被災経験をしていても一人ひとりが違うことを考え、違う行動をしている。「同じじゃないことを表現してほしい」

「一生懸命答えたのに、うまく伝わらなかったさみしさ」は、後輩たちには感じてほしくない。一方、報道のおかげで伝承活動を広く知ってもらえたのも事実だ。永沼さんは、被災地報道はどうあるべきか、被災者とメディアの双方で議論する勉強会を開いてきた。「震災10年」報道を巡るアンケートも実施している。

「被災地のメディアと語り部は、どちらも社会に伝えていく役割を担う。だからこそいい関係を築き、ともに考えていきたい」

■ 寄り添う取材、忘れない （仙台総局・川野由起）

取材で話を聞く相手は、私にとっては「〇〇さん」であって、「被災者」でも「遺族」でもない。でも会話を重ねた後、言葉を切り結びして記事を書く中で、ともすれば均質的な「被災者」を描いてしまっていないかと、悩んできた。

長期的な取材ばかりではない。現場に行って目の前で涙を流している人に、どんな質問ができるか。突然声をかけられ、とっさに答えた言葉がそのままカギ括弧で載り、記事としてずっと残ることが、相手にとってどれぐらい正しいことなのか。

読者のために記事を書くのが原則だと学んできた。だからといって、取材対象者の心に寄り添うことをないがしろにはしたくない。どんな状況でも、自分なりの丁寧さを忘れずに取材していきたい。

---

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.